

## 守備範囲の広さ

株式会社ヒキフネは、創業70年以上の歴史を持つ、めっきの老舗として知られる。「現在までに、めっきのやり方に大きな変化はない」と同社専務・石川英孝氏は言う。

「自動化ラインもありますが、基本的には手作業のめっきです。だからめっきはローテク分野といえますが、一方で、めっきする製品の方は、ほとんどハイテク化しています」

同社は貴金属や置物、仏具などへの化粧めっきにより発展してきた。それが近年では、デジカメ（外装）・携帯電話（電気接点）・光ファイバーなど、ハイテク産業といわれる分野からの依頼が大きな割合を占めるようになった。

いまや同社は装飾めっきに限らず、通電性や抗菌性など、多彩な皮膜特性のニーズに応える「機能

めっき」や、携帯電話の充電部品品の極小パネのように高度な寸法管理が求められる「精密めっき」

を最も得意とする。ナノレベルの転写や、超微細金型の製造に用いる電鍍技術も保有している。

## 株式会社ヒキフネ

# 専務取締役 石川英孝氏



# 伝統と最先端めっき技術の融合

## 伝統と最先端めっき技術の融合

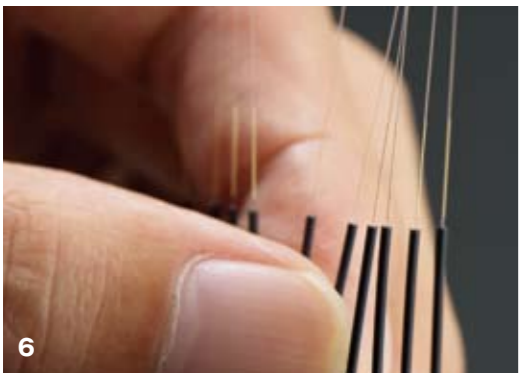
ヒキフネのめっき技術の幅広さ、技術そのものの先鋭化の背景には、技術開発を支える地道な体制づくりがある。とりわけ力を入れているのが、人材の採用と教育である。

正社員の平均年齢は32歳。毎年10人ほどの新卒を採用し、めっき技能士の学校に通わせたり、外部のセミナーにも積極的に社員を派遣している。国家資格の取得を奨励し、資格の取得者には手当も出す。常に新しい風を入れ、社内を活性化させるとともに、10年先、20年先を見据えた育成を心がけている。

また、技術・技能の教育においては、技術の向上に努めるだけでなく「決められたルールを守れること」を重視している。安定した生産体制がなければ、新技術の開発もおぼつかない。ましてや数万点、数十万点といった量産プロセスを、職人の勘に頼るだけで品質保証はできない。

だからといってすべてを自動化できるわけでもない。手作業だからこそ、つくり出せる価値がある。「どれだけ機械化が進んでも、最後はやはり人である」と石川氏。

ローテク・ハイテク、それぞれの価値を最大化して「伝統と最先端めっき技術の融合」を目指す。



1. 「伝統と最先端めっき技術の融合」を目指す。石川専務
2. 徹底した検査が品質を支える
3. デジタルカメラの外観
4. 携帯電話充電器の極小パネ
5. 窓の外には住宅街。創業の地、葛飾で事業を続けてゆくと、環境対策も重要な価値となる
6. 光ファイバーへの精密めっき

ある分野に専門特化する企業が多いめっき業界において、「装飾」「機能」「精密」「電鍍」という4つのめっき事業を備える守備範囲の広さが同社の特色のひとつとなっている。

## 技術の先鋭化

めっき業とは「めっきをつける技術」を売ること」と石川専務。ヒキフネでは、30年ほど前から社内技術部を設置するなど、技術のさらなる先鋭化に余念がない。皮膜全体に均一にサブミクロンのテフロン粒子を分散するめっきや、アルミへの鏡面無電解めっき技術など、新技術・新製品の開発を行っている。

なかでも同社の技術の特色ともいえるのが、「光ファイバーへの精密めっき技術」である。125μmという極細の光ファイバー。そのガラス表面に、微細な寸法管理でめっきを施す。生産プロセスの開発には、1年ほどの試行錯誤を要した。この技術を、量産に耐えるキャパをもつて実現するめっき業者は、全国でも数社程度という。

こうしたヒキフネの技術を求め、海外の高級ファッションブランドからオフアールがあったこともある。大手電機メーカーからの問い合わせも多い。

## ヒキフネ・ブランド

そんな石川氏の目標は、「自社のめっき製品をブランドにまで高めること」

自社のめっき技術と品質を高め続け、いつしか、製品に印された「ヒキフネ」のロゴが、ユーザーにとって高品質と安全の代名詞となってゆく。そんな未来の「ヒキフネ・ブランド」を実現するため、めっきの老舗は進化し続ける。

編集部／近江匡宜

## Company Profile

株式会社 ヒキフネ  
所在地：東京都葛飾区東四つ木 2-4-12  
TEL：03-3696-1981 FAX：03-3696-4511  
担当者：専務取締役 石川英孝  
事業内容：各種めっき加工  
エミダス会社・工場詳細情報：  
<http://www.nc-net.or.jp/emidas/gaiyou.php?45852>  
※「エミダス工場検索」のキーワード検索「ヒキフネ」で検索できます。  
本誌付録の「CD-ROM de バーチャル工場見学」にて、同社の工場技術動画をご紹介します！

